

西インド諸島の スウェーデンボルグジャニズム

大賀 睦 夫

I. はじめに

19世紀のアメリカに、著名なジャーナリストで社会活動家のジョン・ビゲロー (John Bigelow) という人物がいた。1947年に彼の伝記が出版されているが、そのタイトル『忘れられた第一級の市民』からあきらかなように、彼の偉業はアメリカでもいつしか忘れられてしまったようである。1849年から61年まで、ウィリアム・カレン・ブライアントとともに『ニューヨーク・イヴニングポスト』紙の共同所有者となり、この間、編集長として世論をリードする無数の社説を書いた。共和党創設者の一人であり、リンカーンの大統領選出のために尽力した。奴隷制度には道徳的かつ経済的な理由から反対した。南北戦争中はフランス領事に任命され、南部連合の支持国であったフランスを中立国へと転換させるという功績をあげた。その他、刑務所の改革運動、ニューヨーク公立図書館の創設に関わるなど、常に大いなる理想を抱きながら行動し続けた人物であった。

そのビゲローが自らの信仰について語った本がある。その中で彼は、自分がかつて不可知論者であったが、スウェーデンボルグの著作との出会いによってキリスト教の信仰を取り戻したと述べている⁽¹⁾。晩年、彼は自分の教養にもっとも影響を与えたと思える10冊の本を挙げるよう求められ、確実なのはただ2つ、聖書とスウェーデンボルグの『天界の秘義』12巻であると答えたという。

(1) Bigelow (1979) 第1~3章を参照。

それほどまでに熱烈なスウェーデンボルジャンになった。

この本で興味深いのは、彼がスウェーデンボルグの著作に遭遇する経緯である。1853年、いつもニューヨークで活動していたビゲローは、世界で最初の黒人共和国ハイチの政治取材のために西インド諸島を訪れる。そしてその帰途に、セント・トマス島という小島でスウェーデンボルグの著作に初めて出会っている。それは彼の人生の転機になったのであるから、まさに神の摂理と感じられたというのである。

ビゲローが、ニューヨークではなく西インド諸島でスウェーデンボルグの宗教思想に初めて遭遇したというのは、とりもなおさず、スウェーデンボルグの著作が当時、西インド諸島で広範に普及していたということを意味する。ロンドンやアムステルダムで出版された神学著作が、西インド諸島で広く読まれるようになったというのはやや意外である。

当時セント・トマス島はデンマーク領であったが、まだデンマークには宗教の自由はなく、新しい教会が公然たる活動を行うことはできなかった。また巨大な既成教会とは違い、スウェーデンボルグ派の宗教組織としては、イギリスやアメリカに萌芽期の教会があった程度であり、伝道のようなものはほとんどなかった。そのような状況の下で、西インド諸島にスウェーデンボルジャニズムが広がったのはなぜか。本稿はスウェーデンボルジャニズムが西インド諸島で広がった過程をたどり、それが受容された理由を考えてみようとするものである。

II. 奴隷制とスウェーデンボルジャニズム

スウェーデンボルジャニズムが、ヨーロッパから新世界に広がっていく過程をたどっていくと、当時大西洋をはさんで膨大な人口移動があったということにあらためて気づかされる。ヨーロッパから南北アメリカへ多くの人々が移動した。またカリブ海には、アフリカ西海岸から膨大な数の黒人が運び込まれた。いうまでもなくこれらの人口移動をもたらしたのは、ヨーロッパ諸国の植民地主義であり、経済的にはいわゆる三角貿易であった。新世界で奴隷によって

生産された砂糖や綿は、ヨーロッパに輸出され、ヨーロッパの小火器・ガラス・綿布などが西アフリカで奴隷と交換され、彼らは労働力として新世界に運ばれた。新世界のスウェーデンボルジャンの中にはプランターもいたことを考えると、植民地主義に直接・間接にともなう人口移動によって、スウェーデンボルグの著作も広がっていったことがわかる。そのことをまず指摘しておきたい。

次に重要なことは、西インド諸島にスウェーデンボルグの著作をもたらしたのはヨーロッパ人であったが、それはヨーロッパ人のみならず、あるいはそれ以上に奴隷であった黒人の間に広まったということである。これが示唆するのは、スウェーデンボルジャニズムと奴隷制廃止論との関連性である。西インド諸島にスウェーデンボルジャニズムが広まった19世紀初頭は、奴隷制が経済的にも道義的にも維持困難になりつつあった時代だった。そのような転換期において、スウェーデンボルジャニズムという、とりわけ人間の自由意志を強調する思想は、奴隷制に疑問を抱く白人にも奴隷制の廃止を求める黒人にも魅力的なものに映ったのであろう。おそらく、そのような社会状況と思想との相互作用があったのだと思われる。

ただしこれは微妙な問題であり、あまり短絡的に考えてはならないのかもしれない。宗教的教説の政治・社会への影響は間接的なものだからである。宗教は人間精神の内奥に働きかけるのであり、それが特定の政治的・社会的な態度に直結するわけではない。スウェーデンボルグの思想は自由意志を尊重するものであるとしても、彼自身は神学的著作の中で奴隷制廃止について直接言及しなかったし、スウェーデンボルジャンを自認する人がすべて奴隷制廃止に積極的であったというわけではない。しかしキリスト教徒全体の中で考えると、スウェーデンボルジャンの場合は、クエーカーと同様に、奴隷制廃止に積極的な人びとが多かったといえると思う。⁽²⁾

クエーカーの場合は、すべての人の内に働いている「内なる光」を重視するという信仰上の立場が、彼らの社会改革運動への積極的参加につながっているといわれている。スウェーデンボルジャンの場合にも、社会改革運動に積極的になる神学上の理由があったと思われる。そしてそのことが西インド諸島でス

ウェーデンボルジャニズムが広がった理由にもなるのではないか、というのが本稿の仮説であるが、そのような仮説を検証するには事実にあたってみるほかない。しかし西インド諸島におけるスウェーデンボルジャニズムについて述べる前に、まず奴隷制廃止運動の歴史を振り返って、奴隷制問題に関わったスウェーデンボルジャンの実践と宗教的動機の関係について述べておくことが適当ではないかと思われる。

1. シエラレオネ会社の植民事業

あまり知られていないが、奴隷制に反対するもっとも初期の運動の中にすでにスウェーデンボルジャンがいた。そのような運動のひとつが、人道上の立場から、イギリスとイギリス領ノバスコシアの自由黒人をシエラレオネに入植させたイギリスのシエラレオネ会社の事業である。この植民事業における知られざるスウェーデンボルジャンの活動をまず紹介してみよう。

この事業の発端は、1765年にロンドン在住の人道主義者、グランヴィル・シャープ (Granville Sharp) が、西インド諸島バルバドス出身のジョナサン・ストロング (Jonathan Strong) という黒人奴隷を助けたところにあった。ストロングは主人の暴力を受け、瀕死の重傷を負ってシャープの家にとどりついた。シャープは彼を入院させて命を救うとともに、彼を取り戻そうとした主人に対して引渡しを拒絶する訴訟を起こした。「彼はイギリスにいるのだからもはや奴隷ではない」というのがその根拠だった。1768年にシャープは勝訴し、さらに1772年のサマセット事件では、「すべての奴隷は、イギリスの領土に足

(2) キリスト教徒が奴隷制にどのような態度をとったのかを一般的にいうことは難しい。キリスト教の愛の精神が奴隷制と調和するとは思えないが、「ピレモンへの手紙」や「コリント人への第一の手紙」に見られるように、パウロは必ずしも奴隷制を否定せず、奴隷は主人に忠実に仕えることを勧めた。彼の立場は奴隷制を当然の社会制度として是認したうえで、主人も奴隷も差別なく恵みにあずかる者として互いに尊重し協力せよというものであった。したがって、聖書は奴隷制の廃止を認めていないという立場をとった人もいたし、人道上の立場から奴隷制を非難する人もいた。活動を宗教に限定して奴隷制問題には沈黙を守った人もいた。奴隷制が廃止される以前、カトリック教会はローマ教皇が奴隷制を繰り返し非難したものの、公式には奴隷制がただちに邪悪であるわけではないとの立場をとっていた。

を踏み入れた瞬間に自由である」という判決を勝ち取った。これは奴隷貿易廃止運動における大きな前進であり、この判例を勝ち取ったことはシャープの偉大な功績であった。

シエラレオネに人道にもとづく植民地を建設するという案を最初に考えたのは、植物学者のヘンリー・スメスマン (Henry Smeathman) という人物だった。シャープが賛同したこの計画は、イギリス政府を動かし、1787年にシエラレオネに政府の経費で最初の植民が行われた。4月8日、290人の黒人男性、41人の黒人女性、11人の黒人児童、70人の白人男性、6人の白人女性、38人の乗組員を乗せた船がロンドンを出港した。船中での死亡者50人、プリマスでの下船者24人、逃走者23人がでた。しかし新たな参加者があり、最終的に411人がシエラレオネに向かった⁽³⁾。同年、シャープは友人のトマス・クラークソン (Thomas Clarkson) らと12人のメンバーからなる奴隷貿易廃止実行協会を結成した。

シエラレオネへの最初の入植地グランヴィル・タウンは、1790年にジミー王 (King Jimmy) によって破壊されたので、シャープたちは新たな植民のための会社の設立を議会に働きかけた。そして1791年、シエラレオネ会社を設立する法律が成立した。会社の役員にはシャープ、クラークソン、ウィルバーフォースらが名前を連ねている。この会社の経営のもとで1792年、ノバスコシアから1,190人の入植者を乗せた船団がシエラレオネへ向けて出航し、フリータウンが建設された。

以上のイギリスの植民事業について指摘すべき点は、第一に、この初期の奴隷貿易廃止・理想社会の建設の運動は、主として宗教的な動機によって行われたということである。ほとんどの活動家が篤信のキリスト教徒であった。シャープとクラークソンはイギリス国教徒であった。シャープは聖職には就かなかったが、代々イギリス国教会の高位聖職者の家柄に生まれており、クラークソンはイギリス国教会の執事安手を受けていた。奴隷貿易廃止実行協会のメン

(3) Fyfe (1993), p. 19.

バー 12 人のうち 9 人がクエーカーだった。彼らをメソジスト教会の創設者であるジョン・ウェスレー (John Wesley) やジョサイア・ウェッジウッド (Josiah Wedgewood) などの著名人が支持した。そして政治家のウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce) が、議会において彼らを代弁したが、ウィルバーフォースもまた信仰あついキリスト教徒であった。

次にここで指摘しておきたいことは、このイギリスの植民事業に 4 人のスウェーデン人のスウェーデンボルジャンが関与していたということである。4 人のスウェーデンボルジャンとは、ワドストローム (Charles B. Wadstrom), ストランド (James Strand), ノルデンシヨルド (August Nordenskiold), アフゼリウス (Adam Afzelius) である。

この 4 人の中で、『植民論』を出版したワドストロームが奴隷制反対論者としてはもっとも著名な人物であるが、彼自身はシエラレオネに足を踏み入れることはなかった。他の 3 人はこの事業に直接参加し、シエラレオネの入植地で理想社会の建設のために尽力した。ワドストロームについては後で詳しく紹介することとし、ここでは他の 3 人について簡単に触れておこう。

事業に参加した 3 人のうち、ストランドは植民地の評議会幹事に任命され、総督であったジョン・クラークソン (トマスの弟) に忠実に仕えた。シエラレオネの歴史を書いたファイフェによると、彼は「神経過敏で、病気を心配し、アヘンを常用していたが、それは彼の死を遅らせるより早めたかもしれない。彼は 1794 年 10 月に死亡した⁽⁴⁾」という。

ノルデンシヨルドは鉱物学者であると同時に、グスタフ三世に仕える錬金術師であった。歴代のスウェーデン国王とりわけグスタフ三世は、黄金を生み出す「賢者の石」を見つけるために錬金術師を抱えていたが、ノルデンシヨルドはそのような錬金術師のひとりであった。「賢者の石」を見つけ、人類を金銭と悪への隷属から解放する、それによって真の「新エルサレム教会」が到来する、といったことを彼は夢想していたらしい。スウェーデンボルグの著作に興

(4) Fyfe (1993), p. 42.

味をもつようになったのも錬金術を通してであった。しかし1789年に訪れたロンドンで、シエラレオネへの植民事業を知り、その理想に共感してこれに参加した。鉱物学者として植民地が産出する鉱物資源の調査を行ったが、病気のため1792年シエラレオネのフリータウンで客死した。

アフセリウスは、スウェーデンの高名な植物学者リンネ (Carl von Linne) の弟子であった。イギリスの博物学者バンクス (Joseph Banks) とも交友があり、彼の推薦を受けてシエラレオネ会社の事業に参加した。当時、植民地経営においては植物研究が非常に重視されており、その意味では彼も重責を担ったわけである。西アフリカの植物について体系的な研究書を著した最初の人物であった。

彼らはいずれも人道にもとづく植民という理念に共感して、まさに命がけのアフリカへの植民事業に参加したのである。まずここに、理想社会の実現に身をささげたスウェーデンボルジャンの例を見ることができる。ところで、彼らがアフリカをめざした理由には、もうひとつ、いかにもスウェーデンボルジャンらしい理由があった。それは、アフリカの内陸部に最善で賢明な人びとがいるというスウェーデンボルグの神学書中の記述を確かめたいというものである。ノルデンショルドもアフセリウスもそのような目的で内陸への探検を試みてい⁽⁵⁾る。ただし、そうした教会を見出すことはできず、それは結局徒労に終わった。

2. ワドストローム

4人のうち、ワドストロームはとりわけスウェーデンボルジャンの奴隷制への関わりを代表する人物といえるので、より詳しく紹介したい。

彼はスウェーデンボルグの著作の普及活動でも活躍したが、奴隷貿易廃止運動との関連では、すでに1779年、スウェーデンのノールチェーピングで、アフリカ人のための植民地建設を検討することを目的とするスウェーデンボルグの読者の会を組織していた。スウェーデンボルグは彼の著作の中で、アフリカ

(5) Fyfe (1993), p. 43.

人は他の国民以上に内的であり合理的であるので、信仰と善とがひとつになっている国民である、と好意的な評価を与えていた。⁽⁶⁾ 彼らはこれを真剣に考えたのである。そして黒人のための新しい完全な社会の基礎となるような植民地を、アフリカにつくることをめざした。理想社会の建設は、奴隷貿易と矛盾することが明白である。そこでワドストロームらは、人道にもとづく植民地の建設とともに、奴隷貿易に反対する運動を開始した。前述のとおり、イギリスにおいては60年代からシャープ個人による黒人奴隷を救済する活動があったものの、奴隷貿易廃止の運動が組織的に始まったのは、1787年であったから、組織的な活動としてはワドストロームらの活動のほうが8年も早かったわけである。彼らの植民計画案では、植民地建設の目的と入植者の心構えが次のように述べられている。

われわれの自由な社会は、アフリカに、したがって黒人の居住地に設立される。それは、支配権をふるったり、平和をおびやかしたり、人びとを奴隷化したり生活を墮落させたりするなどの侮辱的な目的のためではなく、正常な結婚や子どもたちの教育など、あらゆる穏当な手段で、彼らを文明化し、徐々にわれわれの社会に組み入れるという崇高な目的のためである。この有益な目的を達成するため、各メンバーは、社会全体の規制のもとで、一人もしくはそれ以上の子どもを教育するなど、あらゆる努力を惜しまない姿勢が絶対⁽⁷⁾に求められる。

このワドストロームらの長年の活動は、国王グスタフ三世によって認められ、1787年、彼は国王によって、スウェーデンの植民地の適地を探すためアフリカ西海岸に派遣されることになった。ただし国王の主たる関心は黄金の発見にあったので、二人の博物学者が同行した。

ワドストロームらは、スウェーデンと友好関係を保っていたフランス王室の

(6) Swedenborg (1771), no. 837.

(7) Wadstrom (1968), second part, p. 184.

支援を受け、セネガル会社の船に乗って、セネガル沖のゴレ島やケープ・ヴェルデを調査し、翌年ヨーロッパに戻ってきた。そしてロンドンに滞在中に、彼の経歴を知ったイギリス政府から、アフリカの最新事情について語ってほしいと求められ、枢密院で証言をおこなった。イギリス側から、綿・藍・砂糖などの農産物を交易の対象となるほどに増産するにはアフリカの現地人をどう指導したらいいかと聞かれると、彼は、現地にヨーロッパ人の植民地をつくり、現地の人びとを徐々にならしていくほかない、そしてできればみずからそのような活動にたずさわりたいという趣旨の返答⁽⁸⁾をしている。

その後、ロンドンでスウェーデンボルグ派の教会の立ち上げに協力し、トマス・クラークソンやシャープらとも交流し、彼らに奴隷貿易の実情についての情報を提供した。そして、ちょうどそのとき進展中であったシエラレオネへの植民事業に関心をもった。この植民事業についての情報、彼自身のアフリカ調査、そしてスウェーデンにおける奴隷貿易反対・理想社会建設運動の経験を総合して書いたのが『植民論』(*An Essay on Colonization*, 1794)である。彼は1789年にも、ノルデンショルドとともに『アフリカ西海岸における自由社会の建設案』(*Plan for a Free Community upon the Western Coast of Africa*)を書いているが、これらはいずれもロバート・ヒンドマーシュ(Robert Hindmarsh)という、イギリスのスウェーデンボルジャンによって出版された。

3. 『植民論』

経済学の古典のひとつとされている『植民論』は、二部構成の600ページ近い大部の著作である。初めにアフリカ人の気質や気候・風土・産物等を紹介し、次いで商業原理にもとづいてアフリカにつくられた植民地の歴史と問題点を述べ、後半でイギリスの人道にもとづく植民事業を詳細に紹介するという構成になっている。最後の部分では、デンマークとスウェーデンの事例も短く紹介されている。本書は当時のアフリカの状況を知るための資料として価値があ

(8) Wadstrom (1968), p. ii.

るが、本稿の文脈では、これは雄弁な奴隷貿易廃止論の書物であること、そしてスウェーデンボルグによって書かれたものであるという点に注目したい。

『植民論』ではスウェーデンボルグという名前は一切登場しないので、これがスウェーデンボルグの著作であることはほとんど気づかれないかもしれないが、スウェーデンボルグの著作に親しんだ者であれば、スウェーデンボルグの影響を随所に見出すことができる。たとえば、アフリカ人の性格や気質については次のように書いている。

文明人と未開人を比較しようとする者は誰でも、前者は理知 (reason) によって、後者は意志や情愛いわゆる情熱によって支配されていることを認めるであろう。あるいは、少なくとも一般的には、文明化に応じて人は理知の影響を受けるといえよう。このような見方はアフリカ人にそのまま当てはまるであろう。彼らはヨーロッパ人のような理解力を発達させることは決してなかった。しかし、彼らの自己防衛的な、また社会的な情熱はずっと強力である。彼らほど不敬、侮辱、無礼に敏感で、それに直ちに、激しく反発する人びとはいない。⁽⁹⁾

ワドストロームは、アフリカ人は理知より情熱がうまわっているものの、それは決して彼らが知的に劣っているわけではなく、文明化が進めばより理知的になっていくのだと主張している。人間の能力を理知と情熱に分類して説明するところは、いかにもスウェーデンボルグを想起させる。またこのようなアフリカ人に好意的な見解は、『真のキリスト教』における「アフリカ人は他国民にくらべて内的な判断力をもっている」というスウェーデンボルグの主張を下敷きにしているように思われる。

明確にスウェーデンボルグの用語そのものを使っている箇所もある。文明に

(9) Wadstrom (1968), first part, p. 10.

ついて述べた部分である。

意志と理解力が、人間精神の主要な能力であることを否定する人はいないであろう。意志はあるものを他のものより愛することによって、あるいはそれに愛着をもつことによって動き出す。そして人間のその愛着は他の動物の愛着と同じであるから、もし社会において、人が自分の理解力に社会的な傾向を与える機会をもたないなら、人は破壊的な存在になるであろう。理解力は無限の高みに昇ることができる。この理解力が十分に成熟していれば、それは社会秩序にもっともふさわしい方法で、愛着と意志を支配し導く資格を与えられる⁽¹⁰⁾。

ここで使われている「意志と理解力」は、スウェーデンボルグ神学のもっとも重要な用語である。これらの用語なしにはスウェーデンボルグの再生の教義を述べることができない。彼のいう再生とは次のような過程である。人間の理解力はたやすく無限の高みに昇ることができる。しかし人間の意志はただちにそのような高みに昇ることはできない。しかし理解力が徐々に意志を引き上げ、最後には高い理解力にふさわしい意志をもつことが可能になる。そうなる
と次には意志と理解力の関係は逆転し、その新しい意志の愛にふさわしい理解力をもつようになる。再生とはそのような過程である。ワドストロームのこの部分はスウェーデンボルグの再生の考えを下敷きにしている。つまりスウェーデンボルグが解明した、理解力が意志を引き上げるといふ人間の内面の成長の過程を、ここでは人間集団にあてはめて文明化と彼は呼んでいるのである。

ワドストロームの『植民論』には豊富な資料が盛り込まれているが、その基本の理論的枠組みはスウェーデンボルグである。そして後半の人道にもとづく植民の記述では、理想主義者らしい彼の情熱が伝わってくる。このように理論的枠組みにおいても、人間の自由を尊重し奴隷貿易を批判するという意志の面

(10) Wadstrom (1968), pp. 18-19.

においても、これはスウェーデンボルジャンの書物なのである。

4. 奴隷制に反対したスウェーデンボルジャン

シエラレオネの植民地は1794年、フランスの私掠船によって略奪された。会社の建物はほとんど破壊され、多数の死傷者が出た。シエラレオネ会社はフランス政府に抗議したが、ワドストロームもパリに行き補償を要求した。結局それは拒絶されたが、彼は執政府とナポレオンの厚遇を受け、パリ農業銀行の役員(11)の地位を与えられた。ワドストロームは1799年、パリで死亡した。彼自身は、他の同国人のスウェーデンボルジャンのようにシエラレオネには行かなかったが、前述のとおり、シエラレオネ会社と同様の彼独自の植民計画をもっていたのであり、その計画にイギリスでの支援がえられることを期待していたのであった。しかしそれは彼の死とともに計画のまま終わってしまった。

植民計画は挫折したが、奴隷貿易廃止の実現において、彼の貢献は大きかったといえるであろう。イギリス滞在中、彼はクラークソンやシャープらとともに、奴隷貿易廃止の世論を喚起するために多忙な執筆活動を行った。そして彼らの活動は、1791年にウィルバーフォースが議会で奴隷貿易廃止法案を提出するという成果をもたらした。そしてそれ以後も努力が続けられ、1807年には奴隷貿易廃止法が成立した。ワドストロームはそれを見とどけることはできなかったが、奴隷貿易廃止という偉業達成において、彼が行った大きな貢献を見逃すことはできない。

このように、ワドストロームは世界で最初の奴隷貿易廃止論者というべき人物であるが、彼をそのような行動に突き動かし、支え続けたのがスウェーデンボルグの著作であった。また前述のとおり、彼と同様の行動をとったスウェーデンボルジャンの仲間もいた。これらの事実は、スウェーデンボルグの著作に、人びとをそのような社会改革のための行動へと促すはたらきがあることを示している。それは奴隷制廃止問題に限らないが、ここではこの問題に限定して、

(11) Fyfe (1993), p. 55.

いくつかのスウェーデンボルグに傾倒した奴隷所有者の例を紹介しておこう。

新世界で最初にスウェーデンボルグの教説を広げようとした人物に、ジェームズ・グレン (James Glen) という人物がいた。イギリス、グラスゴー生まれで、大学ではギリシア語、ラテン語、ヘブライ語を学び、卒業後さらにアラビア語、フランス語、オランダ語、ドイツ語をマスターした。二十歳の頃、商船の航海士として南米を訪れ、その地の美女と恋に落ちた。数年後に再びイギリス領ギアナに戻ってきて、総督から土地の下賜を受け、多数の奴隷を所有する裕福なプランターになった。しかし 1781 年に船中で、船長の所有していた『天界と地獄』のラテン語原典を読んでスウェーデンボルジャニズムに改宗したのは、新教会の熱心な伝道者となった⁽¹²⁾。フィラデルフィアやボストン、ヴァージニアやケンタッキーの一部で伝道活動をおこなった。自宅のあるギアナのデメララでは、近隣のプランターたちと小さなグループをつくって活動した。アメリカの新教会の歴史書を書いたブロックは、彼について次のように述べている。「彼には思いやりの心があったので、みじめな奴隷を他の人々が扱うようには扱えなかった。そのため、かつて繁栄をきわめた彼の地所は廃墟と化した。彼は隣人のプランテーションにある質素な小屋で、貧窮のうちに生涯を終えた⁽¹³⁾」。

ヴァージニアのプランターであったトマス・フェアファックス (Thomas Fairfax) も奴隷を解放したスウェーデンボルジャンだった。彼の父フェアファックス卿は、祖父カルペパー卿の残した 500 万エーカーの土地を管理するため、1746 年にアメリカに渡ってきた。彼はスウェーデンボルグの『プリンキピア』と数冊のラテン語の神学書原典を持参するほどのスウェーデンボルグの愛読者だった。フェアファックス卿はイギリス国教会に出席し続け、子どもたちもそこで育てたが、父の影響で息子のトマスとフェルディナンドはスウェーデンボルジャンになった。トマス・フェアファックスは、所有する奴隷たちを手に職をつけさせ⁽¹⁴⁾たうえで解放した。

(12) Block (1984), p. 62.

(13) Ibid., p. 74.

同じく建国期のヴァージニアに、ロバート・カーター (Robert Carter) という人物がいた。彼は祖父のキング・カーターから6万エーカーの地所と600人の奴隷を相続した。トマス・ジェファソンやジョン・ランドルフ (John Randolph) など当時のヴァージニアの名士たちの多くがそうであったように、彼も49歳まで理神論者であった。しかしスウェーデンボルグの著作と大覚醒運動の影響で信仰をもつようになり、1778年、バプテスト教会の一員となった。バプテストになったのは、当時スウェーデンボルジャンの教会がなかったからである。信仰をもつようになって、彼は所有していた奴隷を解放した。彼には1791年に455人の奴隷がいたが、このうち45歳以下の者から毎年15人を、また女性は18歳、男性は21歳になると自動的に解放した⁽¹⁵⁾。自分の地所も処分した。彼は終生奴隷制廃止論者であり、ボルチモア奴隷制廃止協会の活動的メンバーだった。

ワドストロームらと同様、これらの人たちはスウェーデンボルグの影響を受けて、人間の自由意志を尊重する社会の実現のために役立とうとしたのであった。スウェーデンボルグの影響は黒人奴隷制問題だけにとどまらない。ロシアで最初に農奴解放を唱えて行動を起こしたのは、デカブリストと呼ばれる人たちであったが、その中心人物の一人、アレクサンドル・ムラヴィヨフもまたスウェーデンボルジャンであった⁽¹⁶⁾。あるいはアメリカの女性解放運動の活動家の中にも、スウェーデンボルジャンが多数いた⁽¹⁷⁾。それらの領域でも、彼らは自由な社会の実現のために改革運動に積極的に参加したのである。繰り返すが、これがスウェーデンボルジャンのひとつの伝統だということである。

以上を背景的説明として、次に、西インド諸島でスウェーデンボルグの著作が受容されていった過程を述べていきたい。

(14) Ibid., p. 83.

(15) Block (1984), p. 85.

(16) Hallengren (1998), "Revival and Reform in Russia" の章を参照のこと。

(17) Pool (1999) はそのような女性たちを紹介している。

Ⅲ. 西インド諸島のスウェーデンボルジャニズム

前述のとおり、大西洋をはさんで大規模な人口移動があった時代に、生活物資のひとつとしてスウェーデンボルグの著作も新世界に運ばれ、そこから読者が広がっていった。

アメリカに初めてスウェーデンボルグの著作が持ち込まれたのは、1746年のことで、それはアムステルダム版のひとつだったとされている。持参したのは、オランダの教会会議によってフィラデルフィアに派遣されたスイス人の長老派教会牧師、マイケル・シュラッターという人物であった。もちこまれたのはスウェーデンボルグの科学書で、これをシュラッターは子弟のラテン語教育のテキストとして使った。後に彼の孫ウィリアム・シュラッターは有名なスウェーデンボルジャン⁽¹⁸⁾になった。

アメリカで初めて新教会の伝道が行われたのは、1784年のことであった。ロンドンの Great East Cheap Society に所属するジェームズ・グレンがフィラデルフィアでおこなった講演が最初とされている。また、ニューヨークに最初のスウェーデンボルジャンのグループができたのは、1791年のことだった。そのような北アメリカに関することは比較的よくわかっているが、西インド諸島に関しては、いつ誰がスウェーデンボルグの著作を最初にもたらしたか、あるいは最初にスウェーデンボルジャンになったのは誰か、といったことはよく分からない。おそらく西インド諸島においても、北アメリカに似たかたちでスウェーデンボルグの著作が持ち込まれたであろうし、さまざまなスウェーデンボルグの著作との出会いがあったであろうと想像するのみである。

西インド諸島のスウェーデンボルジャニズムを調査したハレングレンによれば、スウェーデンボルグの著作が普及し、新教会の組織があったのは、デンマーク領バージン諸島のセント・クロイ、セント・トマス、セント・ジョンの島々である。このほかジャマイカ、スウェーデン領のサン・バルテルミー、ト

(18) Block (1984), p. 76.

リニダード、トバコ、キューバでスウェーデンボルグの著作が読まれていた。またハイチの国王アンリ・クリストフ (Henry Christophe) は、スウェーデンボルグ⁽¹⁹⁾に傾倒し、これを国教にすることを検討した。以下、これらのスウェーデンボルグの普及の過程を年代順に見ていこう。

1. ジャマイカのスウェーデンボルグ

西インド諸島でもっとも古いスウェーデンボルグがいたのは、イギリス領のジャマイカだった。ジャマイカのチェインバー家は、1640年頃に移住した人々の子孫で、フリーメーソンとの関係をもっていたが、同時に世界でもっとも古いスウェーデンボルグの家族のひとつであった⁽²⁰⁾。スウェーデンボルグが死亡したのが1772年、イギリスで最初のスウェーデンボルグの読者の集會が開催されたのが1783年、そして新しい教会組織の設立に向けて最初の一歩を踏み出そうと、スウェーデンボルグの世界初の総會議 (General Conference) がロンドンで開催されたのが1789年である。この総會議にジャマイカからも代表が出席した。この総會議には、主にイギリスとスウェーデン各地から80人ほどが集まったが、ジャマイカからの出席者は8名だった。そしてこのときジャマイカのロバート・ジャクソンという人物が按手札を受けている。

あらゆるスウェーデンボルグ派の教会の始まりはイギリスと言われるが、ジャマイカのスウェーデンボルグもイギリスと結びついていたわけである。当時、イギリスのスウェーデンボルグの間では新しい教義の普及方法をめぐって激しい議論が戦わされていた。スウェーデンボルグはキリスト教の

(19) 西インド諸島の事実については、主に Hallengren (1998), "The New Church in the West Indies" の章に依拠している。

(20) 普遍宗教をめざす点でフリーメーソンとスウェーデンボルグはよく似ている。スウェーデンボルグはフリーメーソンのメンバーであっただけでなく、その組織の改革者だと言われているが、それを文書で確認することは困難なようである。Schuchard は、スウェーデンボルグが10代のときに彼の義兄であり先生でもあったベンゼリウスを通してフリーメーソンとの出会いがあったと述べている。Schuchard (1988) 参照。

改革者であるが、自ら新しい教会組織をつくることをせず、すでに存在する教会が誤りを正せば十分と考え、関係者に自分の著作を配布した。スウェーデンボルグの例に倣った代表的人物が、ジョン・クラウズ (Rev. John Clowes) であった。彼は国教会に所属しながらスウェーデンボルジャンとして多忙な執筆活動をした。しかしメソジストやバプテストのように、不寛容な教会に所属しながらスウェーデンボルジャンになった人びとは、自らの教会の中で活動することができず、新しい教会組織をつくる必要があると考えるようになった。新しい教義の普及方法をめぐって分離派と非分離派の対立が生じたのである。1789年の総会議は、分離派の人々が新しい教会組織の設立をめざして開催したものであった。ジャマイカのスウェーデンボルジャンは分離派に与したわけである。ちなみにこの会議には詩人のウィリアム・ブレイクも妻とともに出席したが、新しい教会組織の設立をめざすという総会議の結論には賛成できなかったようである。⁽²¹⁾

西インド諸島でスウェーデンボルジャニズムがもっとも普及したのは、バージン諸島であったが、バージン諸島のスウェーデンボルジャンとジャマイカのスウェーデンボルジャンの交流は1841年までなかった。ジャマイカのスウェーデンボルジャンの起源は、もっぱらイギリスで、その活動はチェインバー家の人物を中心とした小規模な集会であった。集会が活発になったのは19世紀前半、1840年頃で、参加者は黒人が多かった。ハレングレンによると、スウェーデンボルジャニズムはジャマイカの黒人の間で重要な宗教であったという。⁽²²⁾

2. ハイチの国王クリストフとスウェーデンボルジャニズム

西インド諸島とスウェーデンボルジャニズムの関わりで次に古いものは、ハイチの国王アンリ・クリストフが、スウェーデンボルジャニズムを新しい国家建設の精神的支柱にしようとした事例である。

ハイチは、独立以前はフランス領で、サン・ドマングと呼ばれていた。世界

(21) Dole (1994) 邦訳 61 ページ参照。

(22) Hallengren (1998), p. 48.

最大の砂糖産地で、1789年当時、45万人もの黒人奴隷が過酷なプランテーションの労働に従事させられていた。1791年8月、フランス革命の影響を受けて奴隷反乱が発生し、トゥサン・ルーベルチュール (Toussaint L'Ouverture) の指導下でそれが独立革命に発展した。1801年、憲法が制定され、彼は終身総督となるが、ナポレオンが革命を鎮圧する。ルーベルチュールは捕えられ、1803年フランスで獄死した。しかし彼の後継者デサラン (Jean-Jacques Dessalines) とクリストフが戦争を継続し、1804年1月独立が宣言された。新しい共和国はフランス支配の痕跡を一掃すべく、インディオの古い呼称ハイチを採用した。しかし独立後も政治は安定せず、ナポレオンにならって皇帝となったデサランは1806年に暗殺され、その後はクリストフとペション (Alexandre Petion) の対立から、クリストフを国王とする君主国のハイチと、ペション率いるハイチ共和国の二つの政府が生まれた。クリストフは1820年、部下の反乱から自殺に追い込まれ、ハイチはペションの後継者ボワイエ (Jean-Pierre Boyer) によって統一された。

ハイチの独立は以上の過程をたどったが、ここでの主役は、スウェーデンボルグの思想に傾倒した国王クリストフである。彼は奴隷として生まれ、革命運動の指導者から国王となり、新国家を建設する途上で悲劇的な最期を遂げた。その生涯を通じて矛盾に満ちた人物として知られている。フランスの支配、奴隷制に抵抗し、革命を成功させると、奴隷制によって無知で無気力状態になった民衆を、勤勉で誇りをもった国民につくりかえようとした。彼は、人びとが無知では獲得した自由を守りつづけることはできない、民衆の教育こそが最重要課題だと考えていた。

クリストフは、ハイチ革命を弾圧したフランスに強い敵意を抱く一方で、孤立しては生存が危ういと考え、イギリスに接近した。政治家で奴隷貿易廃止論者のウィルバーフォースと連絡を取り、彼を通してさらにトマス・クラークソンとも手紙のやりとりをするようになった。クリストフとクラークソンとの往復書簡が残されているが、その中で彼は次のように述べている。

ずっと私の目的・悲願は、私を信任し私に運命を託した国民に公共教育を保障することでありました。・・・私はこの仕事に全精力を傾けています。現在、都市と地方の公共教育に必要な施設を建設中です。私が要望した教師と職人の到着を待ちわびています。彼らが若者の訓練をしてくれるでしょう。・・・もし神が私の仕事を祝福し、十分な時間を与えてくださるなら、ハイチの国民は、彼らに長い間押しつけられてきた恥辱的な偏見を克服し、彼らの知識によって世界を驚かせること⁽²³⁾でありましょう。

このように、教育を新しい国づくりの柱にするほどに重視したが、しかしその手段において、彼は自分の命令への絶対服従を要求した。いかなる反対も許さず、反対する者への怒りはとどまるところを知らないといわれるほどだった。高邁な理想主義者と気まぐれな専制君主の性格が同居していた啓蒙専制君主、と評されることがある。

しかし、専制君主であったというマイナス評価については次のような事情を考慮しなければならない。第一に、当時のハイチでは一般的に黒人は手荒な扱いを受けたし、人間の命の値段は安かった。第二に、彼自身奴隷であり、教育を受けて性格を矯正する機会は一切なかった。第三に、無政府状態と混乱の只中で権力の座についたため、強制的な手段が必要不可欠だった。弱みを見せると死が待っていた。そのような当時の状況から自由であることはできなかったのである。クラークソンとの往復書簡の編者は次のように述べている。

目的を達成するために彼がとった手段だけでなく、彼の目的の気高さ遠大さも考慮して判断しなければならない。彼は権力の座につくと、将来、無知で怠惰で貧しいハイチの人々が、勤勉で自尊心をもった人間に高められ、世界の国々の間にしかるべき地位を獲得するであろうと夢見たのであった。大望に駆られて、アンリ・クリストフはヨーロッパ人が何世紀もかかって達成

(23) Griggs & Prator (1952) p. 91.

(24) Ibid., p. 4.

したものを、黒人の同胞のために14年間で実現しようとしたのであった。⁽²⁴⁾

そのようなクリストフが、革命後の国家建設にあたるに際し、その精神的支柱として採用しようとしたのがスウェーデンボルジャニズムであった。奴隷制廃止のために尽力した人びとの中に、ワドストロームやビゲローなどのスウェーデンボルジャンがいたことを上で述べたが、クリストフもまた隷従の精神とは正反対のものを、スウェーデンボルグの著作の中に見出したのである。

そのような計画をもっていたクリストフであったが、1820年、卒中の発作で倒れると部下の反乱が起こり、彼は自殺に追い込まれた。こうしてスウェーデンボルジャニズムを国教とする彼の計画は実現をみることなく、彼の死とともに消滅した。

なお、彼がスウェーデンボルグの著作を知ったのは、アメリカの新教会員ウィリアム・シュラッターの伝道活動で著作が送られてきたことがきっかけだった。前述のとおり、彼はアメリカに最初のスウェーデンボルグの著作をもたらしたマイケル・シュラッターの孫であった。小さな本屋を開き、スウェーデンボルグの書物を出版しては、それをアメリカ中の読者に無償で送るという事業を實踐し、20万ドルの財産のほとんどを費やしてしまった。財産を失ったが、アメリカに出回った新教会の本のことを考えると慰められると語ったと伝えられる。彼はスウェーデンボルグの著作をアメリカ国内のみならずインドにもハイチの国王にも送ったのだ⁽²⁵⁾だった。

3. バージン諸島

西インド諸島でスウェーデンボルジャンの活動がもっとも活発であったのは、デンマーク領の三つの島、セント・クロイ、セント・トマス、セント・ジョンにおいてであった。この地域では1820年代から、スウェーデンボルグの著作、とりわけ黒人の優れた霊性が説かれている『真のキリスト教』を広める活

(25) Block (1984), p. 78.

動が見られた。そしてそれは1840年代に、小規模ながらも事実上の教会組織の設立へと発展していった。1846年6月28日には、セント・クロイ島クリスチャンステッドにおいて、バージン諸島で最初のスウェーデンボルグの礼拝が行われている。

バージン諸島の最初のスウェーデンボルグは、ヨーロッパ系で比較的社会的地位の高い有力者たちであった。セント・クロイ島の中心人物は、カール・キエルフ (Carl Andreas Kierulff) という法律家であった。セント・トマス島の最初のスウェーデンボルグは、シェリフのヴァイブ・キエルフ (Vibe Kierulff) であった。キエルフという名前はデンマークの名前らしい。そしてセント・ジョン島の最初のスウェーデンボルグは、裁判官のヘニング・リンバーグ (Henning Gotfried Linberg) であり、後にセント・クロイ島に移っている。彼らの活動の中心はスウェーデンボルグの著作を広めることであったが、その活動は白人社会から徐々に黒人社会にも広がっていった。以下は彼らの主要な活動を年表風にまとめたものである。

1826年頃 ヴァイブ・キエルフのサークルに参加した簿記係のアンドレアス・バーチ (Andreas Birch) は、スウェーデンボルグの著作を出版するための募金を開始する。多数のプランテーション所有者から賛同を得る。

バーチはロンドンのスウェーデンボルグ協会を訪問し交流をはかる。

1830年 バーチはバージン諸島の約600人の人々にスウェーデンボルグの著作を紹介する手紙を送る。

1830年代 セント・クロイの人々が、ロンドン、マンチェスター、ボストンの各出版社にスウェーデンボルグの著作を多数注文する。

リンバーグは、ボストンでもてるかぎりのスウェーデンボルグの著作を購入する。カール・キエルフとヴァイブ・キエルフは、ボストンとニューヨークで同様にスウェーデンボルグの著作を購入する。

1846年 6月28日、セント・クロイ島クリスチャンステッドの法律家カール・キエルフの家で、新教会の最初の正式の礼拝が行われる。新教会のメンバーは2~30人。式を執り行ったのは歯科医のエライジャ・ブライアン(Elijah Bryan)。サークルのリーダーはカール・キエルフ。

バーチとブライアンはクリスチャンステッドでスウェーデンボルジャンの集会の許可を求めるが、総督ショルテン(Peter von Scholten)は、デンマークの法律と政府の決定により、新しい教会は認められないと拒絶する。ただし私的な集会を黙認した。

A. バーチ死亡。

1848年 バージン諸島で奴隷制廃止。

セント・クロイ島(人口約3万人)のカトリック、ルター派(デンマークの国教)、イギリス国教会、モラビア派、ユダヤ教の5つの公認の既成教会のいずれからも新教会への改宗者が増える。そのため既成教会内に新教会への反発が強まる。

黒人、混血の新教会員が急増。スウェーデンボルジャニズムは多様な文化をつなぐ存在となる。

70人規模の集会が可能な集会所をもつようになるが、出席者多く収容できず。新しい集会所を探そうとするが、既成教会と政府の反対に会う。

1849年 カール・キエルフ死亡。

1850年 エライジャ・ブライアンが按手礼を受け、バージン諸島の正式の牧師となり、礼拝、洗礼、聖餐式、日曜学校を始める。

1860年代 セント・クロイで黒人の新教会牧師が誕生。

1864年 2月21日、クエイカーの牧師ムーアが新教会の集会に出席する。これが記録上最後の新教会の集会。

1867年 エライジャ・ブライアン死亡。

1874年 ヴァイブ・キエルフ死亡。

1880年代 スウェーデンボルグの影響はバージン諸島から完全に消滅する。

以上のプロセスで注目したいのは次の諸点である。1. バージン諸島のスウェーデンボルジャニズムとイギリスおよびアメリカの新教会との結びつき。2. スウェーデンボルジャニズムの黒人への広がり。3. 既成教会との関係。4. スウェーデンボルジャンと社会活動との関係。5. バージン諸島からのスウェーデンボルグの影響の完全消滅。以下、これらの諸点について少し説明を加えておきたい。

バージン諸島のスウェーデンボルジャンは、イギリスおよびアメリカのスウェーデンボルジャンと結びついていた。セント・トマスのアンドレアス・バーチは、イギリスのスウェーデンボルジャン、ウィルキンソン (James John Garth Wilkinson) と連絡を保っていた。ウィルキンソンはイギリスの高名な科学者で、スウェーデンボルグの科学的著作を翻訳し、その出版のためにスウェーデンボルグ協会を設立したことで知られる。非分離派の立場をとり、スウェーデンボルグの思想に傾倒しつつも終生国教徒であった。⁽²⁶⁾

セント・クロイの牧師のブライアンは、1850年にアメリカのスウェーデンボルグ派の教会でサラマン・ブラウンから挨拶を受けている。ブラウンも著名なスウェーデンボルジャンだった。1840年代にはアメリカでフリーエ主義が広がったが、スウェーデンボルジャンの中にもフリーエに傾倒する人びとが現れ、短期間ではあれ2つのスウェーデンボルジャンのファランジュ（共産的自治団体）ができた。そのひとつで牧師、教師、歯科医師として働いたのがブラウンだった。ブライアンとブラウンの関係の詳細は不明であるが、歯科医師という共通項がある。

またブライアンは、1856年から死亡する1867年まで、アメリカの General

(26) 余談だが、スウェーデンボルグの影響を受けたアメリカの神秘主義者トマス・レイク・ハリスが1859年にイギリスを訪問した際、ウィルキンソンは自宅で彼をもてなした。ローレンス・オリファントがハリスに出会って彼に心酔したのはそのときだった。オリファントは外交官として来日した後、下院議員となり、イギリスに来た日本人留学生の面倒を見た。そして彼らをハリスがつくった新生同胞教団に送り込んだ。その中に森有礼や新井奥邃らがいた。森や新井はハリス教団でスウェーデンボルグの著作に接する。こうしてスウェーデンボルグの思想は日本の知識人にも影響を与えることになったのである。

Convention と連絡をとりあっていた。その一方で、アメリカの著名なスウェーデンボルジャン、ジョージ・ブッシュ (George Bush) 博士と手紙のやりとりをしていた。ブッシュはスウェーデンボルジャンではあったが、強硬な反教会主義者で Convention の権威を認めようとしなかった。⁽²⁷⁾ イギリスやアメリカでは、スウェーデンボルジャンニズムの成長の過程で、分離派對非分離派、教会中心主義對リベラリズムという路線対立が生じたが、バージン諸島のスウェーデンボルジャンは、これらのグループのいずれとも関係をもっていた。それはおそらくバージン諸島のスウェーデンボルジャンニズムが、イギリスやアメリカほどには成長しておらず、未分化状態だったからではないかと思われる。

なお、19世紀のアメリカではかなり急速に新教会が成長していったが、新教会からの伝道があったわけではなく、両者の関係は、バージン諸島の熱心なスウェーデンボルジャンが独自に活動をしながら英米の新教会とも連絡をとりあうという形で展開した。

黒人、ムラートの間でスウェーデンボルジャンが増加したことも注目される。スウェーデンボルジャンニズムは、ここではヨーロッパ系の理想主義者、人道主義者の運動として始まったが、次第にアフリカ系の人びとによって引き継がれていった。ブライアン牧師の1852年の報告によれば、教会は貧しく、50人の受洗者のうち、裕福なのは3人のプランターのみであった。そして職人、⁽²⁸⁾ 女裁縫師、靴修理人、消防士などを生業とする黒人、ムラートが増えたという。とくに、バージン諸島で奴隷が解放された1848年頃、スウェーデンボルジャンの集会への黒人の参加者が急増した。当時、セント・クロイにはヨーロッパ人のスウェーデンボルジャンとほぼ同数のアフリカ人のスウェーデンボルジャンがいた。⁽²⁹⁾ セント・トマスでは大部分が黒人だった。

(27) ジョージ・ブッシュ博士は牧師の資格をもつ著名な言語学者。宗教学、言語学、スウェーデンボルグに関する著作がある。ニューヨーク大学で教鞭をとった。ジョージ・W・ブッシュ現大統領の曾祖父の曾祖父にあたるティモシー・ブッシュの弟である。JSA 会報編集部 (2001), p. 29 を参照。

(28) Hallengren (1998), p. 53.

(29) Ibid., p. 55.

スウェーデンボルジャニズムは、黒人ばかりでなく、多様な歴史的背景をもった他教派の白人たちにも広がっていった。スウェーデンボルジャニズムが入ってくる以前、セント・クロイには5つの既成教会があったが、そのすべてからスウェーデンボルジャニズムに改宗する人びとが出てきた。5つの既成教会の存在は、まさにバージン諸島の歴史を象徴するもので、カトリックはここがかつてフランス領であったことを、ルター主義はデンマーク領になったことを、イギリス国教会、モラヴィア教会、ユダヤ教はそれぞれイギリス人、ドイツ人、ユダヤ人がこの地域に到来したことを意味した。スウェーデンボルジャニズムは、それらの教会組織を横断して広がっていった。バージン諸島のスウェーデンボルジャンのリストを調べたハレングレンは、当初ほとんどが北欧系の名前であったものが、時代を下るにつれて実に多種多様な名前に変化していったと指摘している⁽³⁰⁾。ただし、宗教の自由はまだなく、スウェーデンボルグ派の教会は公式には認められなかった。

スウェーデンボルジャニズムの広がりへの反動として、既成教会からの迫害もあった。ルター教会のデンマーク人牧師は、ブライアンによる礼拝は平信徒による礼拝であり、許されないと主張した。イギリス国教会の牧師ホーリー (F. L. Hawley) は、ブライアンに「セント・クロイにもう一度来たら身の安全は保障できない」と脅し、信徒に対しては「スウェーデンボルジャンは羊の皮をかぶった狼である」と対立感情をあおった。国教会の働きかけで融資を受けられなくなり、商売を続けられず、島を去らなければならなくなったスウェーデンボルジャンもいた。新教会の公的承認を求めて活動していたプランターで、国教会からの改宗者であったルアン (William H. Ruan) は、街頭でホーリーの攻撃を受け、「裏切り」と「破壊活動」のために殴り倒された。ブライアンも実際に暴行を受けた。これについてはあきらかに行き過ぎであると国教会の信徒からも抗議を受けたので、その後、ホーリーはスウェーデンボルジャニズムの非合法性、教義の誤りと不道徳性を強調するなど言論による批判を行うよう

(30) Hallengren (1998), p. 48.

になった。彼は『結婚愛』の一節を引用し、スウェーデンボルグが情婦を持つことを認めていると非難した。既成教会の聖職者による迫害は、スウェーデンボルグの成長を示すものであり、迫害する側もスウェーデンボルグの著作を読んで非難したということは、スウェーデンボルグの著作がそれだけ容易に入手できるほど普及したことを示すものであった。

ただし、ルター教会や国教会とは異なり、スウェーデンボルグと良好な関係を維持した教会もあった。黒人の学校や心のケアに関心をもつなど社会的活動に熱心であったモラヴィア教会がそのような教会で、彼らはスウェーデンボルグの成長をよい宗教とみなし好意的だった。モラヴィア教会とスウェーデンボルグの共通点は、善行を重視する点である。結局、行いに着目するなら信仰の違いを超えて寛容でありうるということであろう。これに対し、スウェーデンボルグに過剰反応して迫害した牧師は、所属教会の教義と組織の防衛をもっとも重視していた⁽³¹⁾。

スウェーデンボルグは社会活動に積極的であると上に述べた。次に、これについて考えてみよう。ワドストロームのような華々しい活動をしたスウェーデンボルグは報告されていないが、ハレングレンは次のようなエピソードを紹介している。1860年代に、レイチェル・ウィルソン・ムーアという、人道主義者でクエーカーの牧師をしていた女性が、フィラデルフィアからセント・クロイにやってきた。ムーアは島の各地を回って伝道活動をすると同時に、正義や政治や道徳についても語って、人々の社会問題への関心を高めようとした。当局はそれが暴動につながりかねないことを危惧し、屋外での集会を禁止するなど、彼女の活動を規制した。集会所を探すのも一苦勞だった。彼女は黒人への人道的支援を行っていたモラヴィア教会に期待し接触するが、牧師に断られた。結局、援助の手を差し伸べたのは、黒人でスウェーデンボルグの集会のリーダー的存在の人物だった。彼らにとっては、ムーアの主張は当

(31) 信仰は必然的に多様であるが、善は普遍的であるといえよう。スウェーデンボルグは普遍性について次のように述べている。「主の教会は、全地にあまねく分散していて普遍的である。それぞれの宗教にしたがい仁愛の善に生きる者はすべてその教会に含まれる」。Swedenborg (1758), no. 328.

然のことで、破壊的でも奇妙でもなかった。彼女は日記に次のように記した。

「権利拡張についての私たちの考えは、ある人々にとっては物議をかもすが、別の人々にとっては世界でもっとも精神を高揚させる⁽³²⁾考えである」。人道主義者の活動に協力するという形であるが、これもまたスウェーデンボルジャンの社会改革への関心の強さを示すエピソードだと思う。

そのような交流をきっかけに、1864年2月21日にムーアはスウェーデンボルジャンの集会に出席した。これが文書でたどりうる最後のスウェーデンボルジャンの集会であるという。

1880年代までには、バージン諸島からスウェーデンボルグの影響は消滅した。理由はいくつか考えられる。バージン諸島の新教会は、最後まで政府の許可をえることができず、公式に活動することができなかった。また初期の活動の中心人物が死亡したり、高齢化したりして、活動が弱まった。そしておそらく最大の理由は1870年代の動乱であった。かつて繁栄を謳歌したバージン諸島の砂糖経済は、1848年の奴隷解放、熱帯の他の砂糖きび産地との競争、甜菜糖との競争などによって、徐々に衰退に向かったが、70年代の動乱がこれに決定的な打撃を与えた。これによって社会秩序が崩壊したことが大きかったと思われる。また教義的な問題も関係しているのかもしれない。教会組織が大きくなならない、というのがスウェーデンボルグ派の教会の特徴といえるが、その理由は普遍性を重んじるからである。普遍性を重視するので特定の組織に所属しないスウェーデンボルジャンが多いし、親は子どもを教会組織に拘束しない傾向がある。普遍宗教をめざすことが組織的な弱さを生んでいるのかもしれない。

しかしそれでも、バージン諸島で約半世紀の間広がった宗教思想が、なぜ消え去ってしまったのかを、完全に説明することはできない。アメリカでも、スウェーデンボルジャンの数は19世紀を通じて順調に増え続けたが、1890年頃をピークにして、その後はかなり急激に減少に転じている。19世紀にスウェ

(32) Hallengren (1998), p. 57.

ーデンボルジャニズムが拡大する何らかの理由があったのであろうか。これはまた別の機会に考察すべき課題であるが、確実なことは、奴隷制廃止の間にはさんだ約半世紀の間に、バージン諸島でスウェーデンボルジャニズムが広がったという事実である。

4. サン・バルテルミー、トリニダード、トバゴ、キューバ

西インド諸島のスウェーデンボルジャニズムでそれ以外に知られているのは、スウェーデンが1784年から1877年の間領有したサン・バルテルミーの初代と2代目の総督がスウェーデンボルジャンであったということ⁽³³⁾、スウェーデンの初期の植民事業の目的地となったトリニダードとトバゴでスウェーデンボルジャンがいたらしいこと、キューバにも1950年代までスウェーデンボルグの影響が見られたこと、しかし革命後はそれが消滅したことなどである。しかしいずれも資料が不十分でよく分かっていない。

おわりに

西インド諸島でスウェーデンボルジャニズムが広がった背景には奴隷制の問題があった、というのが本稿の仮説であった。それは上に述べた事実によってある程度確認されたのではないかと思われる。ワドストロームをはじめとするスウェーデン人のスウェーデンボルジャン、スウェーデンボルジャニズムに傾倒したハイチの国王、砂糖農園のプランター、そしてバージン諸島の黒人、そのような人びとに共通する問題が奴隷制であった。西インド諸島でスウェーデンボルジャニズムの広がった時期は、奴隷制をめぐる紛争がピークに達した時期とほぼ一致していた。そして多くのスウェーデンボルジャンが、人間の隷属状態からの解放をめざして活動したという事実があった。

ではスウェーデンボルジャンを政治的、社会的な改革運動へと向かわせる神学的根拠は何か。ハレングレンは以下の諸点をあげている。⁽³⁴⁾

(33) Hallengren (1998), p. 50.

(34) Ibid., p. 52.

- ・奪うことのできない人間の特性としての自由の強調，また道徳性の基盤としての自由意志の強調
- ・人間はすべて神の前に平等であり，それゆえに宿命も神罰もないという見解
- ・道徳の最大限の重視，すなわち善，隣人愛，行為は信仰に勝るという主張
- ・「隣人」とは社会であり，国であり，人類全体であるという考え
- ・アフリカ人の深い霊性についての教え
- ・アフリカ人に受け入れられやすい，アフリカ固有の宗教につながる霊界についての教義

これに異論があるわけではないが，私がぜひ付け加えておきたいと思うのは次の2点である。すなわち，人間の自由や平等の主張が真理であると確信させる説得力が，スウェーデンボルグの著作にあること，そして善を実践する際のマニュアルがあるということである。これらが重要であるのは，善を考えるだけで行いが伴わなければ無に等しいからである。理神論者といわれるジェファソンは，独立宣言の中で「自明の真理として，すべての人は平等につくられ，造物主によって，一定の奪いがたい天賦の権利を付与され，その中に生命，自由および幸福追求の含まれることを信ずる」と書いたが，このとき，「すべての人」の中に黒人は含まれていなかった⁽³⁵⁾。彼は言行不一致なのである，彼の「真理」は，自分の利益とぶつかるとすぐに輝きを失ってしまうようなものでしかなかった。奴隷貿易は非難するが奴隷制そのものの廃止は是認できない。これがプランターとしてのジェファソンの限界であるというのはよくわかる。結局，「すべて」の人間の自由や平等を信じていなかったということであろう。しかし当時，無名だがその限界を乗り越えたプランターたちもいたことは上述のとおりである。同じように人間の自由と平等を説きながら，一方は頭で考えただけであり，他方はそれを自分のものにした。この違いが生まれてくるところが重要だと思うのである。

(35) Bernstein (1968) 邦訳8ページ。

キーワードは相応である。スウェーデンボルグの主張は、彼が自分自身で考え出したものではなく、相応によって明らかになる聖言の内的意味として述べられる。これが強い説得力をもつのだと思う。冒頭に紹介したビゲローは、旧約聖書は矛盾と不合理に満ちた無意味な文書にすぎないと思っていたが、相応による聖言解釈によって、その文字の意味の背後に、より深い驚くべき意味があると気づいて「ほとんど狂気と思えるほど『著作』に没頭した」と述べている。⁽³⁶⁾

一例をあげてみよう。創世記に次のようなイシマエル物語がある。アブラムと妻サライの間には子ができなかったので、召使のハガルとの間に子をつくり、イシマエルと名づけた。その後、アブラハムと妻サラとの間にイサクが生まれる。イシマエルはイサクをあざけるので、サラの言うことを聞いて、アブラハムはイシマエル母子を荒野に追放する。

これを文字どおりに読むと、ビゲローが憤ったように、アブラハムは残酷な無責任な父親でしかない。聖書とはいうものの、どこに聖なるものがあるのかわからない。しかしスウェーデンボルグによれば、古代の人は相応によってこの物語の中に霊的なものを読み取ったというのである。

それによれば、これは主の栄化の過程の一部を表わす。イシマエルとは記憶知の情愛に神の善が流入して生まれた人間的合理性を意味する。イサクは神の善と神の真理との結合から生まれた神的合理性を意味する。イシマエル（人間的合理性）は荒野（精神の荒廃状態）をさまよう運命にあるもので、イサク（神的合理性）とは対立する。したがって主はそれを追放される。これが聖言の内的意味であるという。これを人間の再生に当てはめると、イシマエルとイサクは再生前の合理性と再生後の合理性に相当する。試練に会うと曖昧になってしまうのが再生前の合理性である。聖書のイシマエルの物語によれば、再生後の合理性は残され、再生前の合理性は追放されるということである。

このような内的意味が延々と述べられているのが『天界の秘義』である。彼のすべての主張は、彼が考えたことではなく、聖言の中に見出したものとして

(36) Bigelow (1979) 邦訳 34 ページ。

説かれるところに、それを受け入れる人にとっての重みがあるといえよう。また相応によって明らかになることは、聖言は人間の再生の問題、精神の成長の問題を扱っているということである。聖言にはそのプロセスが詳細に描かれており、スウェーデンボルグの読者はそこに人生の道標を見出すことができるのである。再生とは試練に直面し、それを克服していく過程である。試練に直面したとき、自分の力だけではそれを克服していくことはできない。プランターにとって「すべての人間の自由と平等」を受け入れることは困難である。しかし、その困難を乗り越えるマニュアルがあれば、実際にそれを乗り越えることができるかもしれない。そのような支えをスウェーデンボルグの著作は提供するのである。

生涯を奴隷制廃止運動にささげた人、所有する奴隷を解放し全財産を処分し施したプランター、そのような人びとの内面の葛藤は想像を絶するものがあったと思う。そのような行為はほとんどの人にはできないことだが、それを可能にしたものは何だったかを考えてみるなら、スウェーデンボルグが社会改革に積極的である理由がわかるのではないだろうか。

引用文献

- Bernstein, B. J. ed., *Toward A New Past* [1968] (Random House) (琉球大学アメリカ研究所訳 (1972) 『ニュー・レフトのアメリカ史像』 (東京大学出版会)).
- Bigelow, J., (1979), *The Bible That Was Lost And Is Found* [1893] (Swedenborg Press) (鈴木泰之訳 (1997) 『見失っていた聖書が見つかった』 (クエリテ出版)).
- Block, M., (1984), *The New Church in the New World: A Study of Swedenborgianism in America* [1932] (Swedenborg Publishing Association).
- Dole G. F., (1994), *Sorting Things Out* (J. Appleseed & Co.) (大賀睦夫訳 (1998) 『スウェーデンボルグ神学に学ぶ』 (日本スウェーデンボルグ協会)).
- Fyfe C., (1993), *A History of Sierra Leone* [1962] (Gregg Revivals).
- Griggs, E. L. & Prator C. H. eds., (1952), *Henry Christophe & Thomas Clarkson: A Correspondence* (University of California Press).
- Hallengren, A., (1998), *Gallery of Mirrors: Reflections of Swedenborgian Thought* (Swedenborg Foundation).

- Pool, S. F., (1999), *Lost Legacy: Inspiring Women of Nineteenth-century America* (Chrysalis Books).
- Schuchard, M. K., (1988) "Swedenborg, Jacobitism, and Freemasonry." In Brock E. J. et al. eds. *Swedenborg and His Influence* (The Academy of the New Church).
- Swedenborg, E., (1758), *De Caelo et Ejus Mirabilibus et de Inferno* (長島達也訳 (2002) 『天界と地獄』 (アルカナ出版)).
- Swedenborg, E., (1771), *Vera Christiana Religio* (長島達也訳 (1989) 『真のキリスト教』 (アルカナ出版)).
- Wadstrom, C. B., (1968), *An Essay on Colonization, Particularly Applied to the Western Coast of Africa, with Some Free Thoughts on Cultivation and Commerce* [1794] (Reprint, Augustus M. Kelley Publishers).
- JSA 会報編集部 (2001) 「研究・ジョージ・ブッシュ博士について」『JSA 会報』第 10 号。